

藤枝市寺家前遺跡から出土した柄付き鉄製鎌について

中川律子

要旨 静岡県中部の藤枝市、志太平野の北東部に所在する寺家前遺跡では弥生時代後期の集落跡と水田跡が見つかっている。山裾には竪穴住居があり、更に南側の低地部には水田跡が広がっている。水田は地形を上手く利用しながら、杭列・矢板を伴う大畔で区画され、更にその中には小さく区画された畔の跡が見つかっている。その杭列を伴う畔のひとつSK-6の南側から、柄に装着された鉄製の鎌が出土した。共伴する周辺の土器などから鎌は弥生時代後期のものである可能性が高まった。柄と刃が一体になって出土した弥生時代の鎌はこれまでに類例がなかった。新たな資料の発見により、鎌刃の装着方法や角度、鎌柄の構造などが徐々に解明されてくるであろう。

キーワード：柄付き鉄製鎌、鎌柄、鎌刃、杭列を伴う大畔、グミ属、建築部材、志太平野、樹種同定、水田跡、弥生時代後期の集落跡

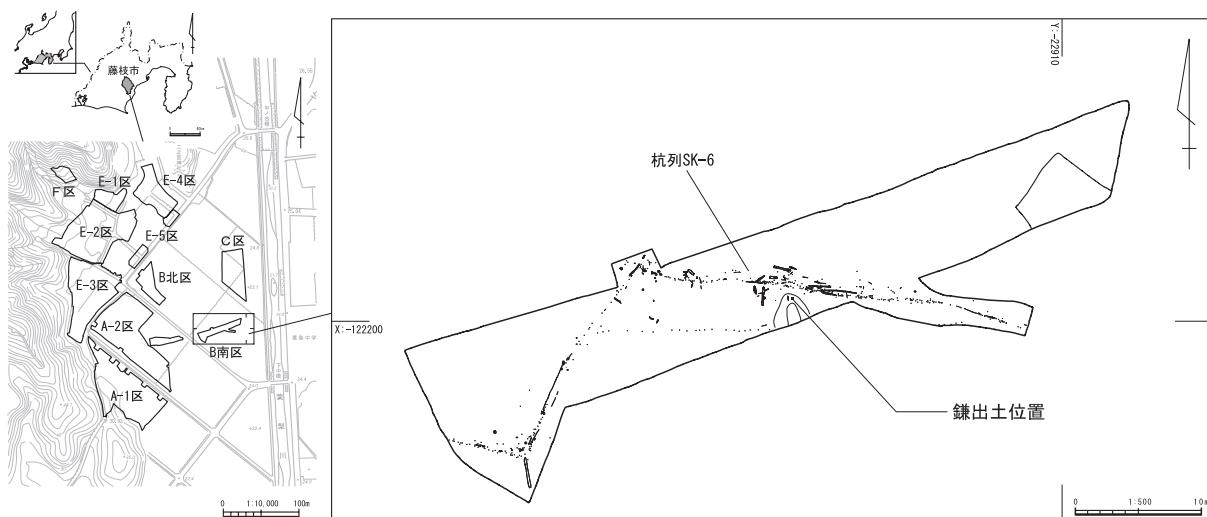
1 はじめに

藤枝市寺家前（じけまえ）遺跡は、当研究所が平成11年度から発掘調査を実施してきた集落・生産遺跡である。すでに平成18年度末に現地調査を終了し、現在は資料整理と報告書刊行に向けての作業を進めている。調査原因是、第二東名自動車道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として始まり、最終的には37630m²という広大な面積の発掘調査を実施した。遺跡の年代は、弥生時代後期～近・現代までと幅広い遺構・遺物が見つかっている。このうち弥生時代後期の集落と水田からは、夥しい数の木製品が出土した。特に注目されるのは、9～10層と呼ばれる包含

層から、高床式倉庫や住居等に使われた建築部材等がまとめて出土したことである。同層からは鍬・鋤とその未製品、田下駄、槽、背負板、臼、竪杵などの製品も見つかっている。

本稿の目的は、こうした貴重な資料をいち早く公表することによって、研究資料として活用ができるようにすることである。また報告書刊行までの間、資料の充分な調査と検証を行う必要があると考えるからである。

今回は低湿地の水田跡から出土した柄付き鉄製鎌についての資料紹介をする。本資料は弥生時代後期に属すると思われる鎌で、木製の鎌柄に鉄製の鎌刃が装着した状態で見



第1図 藤枝市寺家前遺跡の位置と柄付鉄製鎌の出土位置

つかっている。本資料の出土状況や形状の詳細と共に、樹種や類似例等にも触れて検証する。

2 遺跡の概要

寺家前遺跡は藤枝市域の北東部に所在する弥生時代～近世までの集落・生産遺跡である。遺跡の東側を流れる葉梨川は瀬戸川丘陵に端を発している。遺跡が所在する葉梨地区は、この葉梨川の中流域にあたる。遺跡調査前の当地は、葉梨川とその支流の半谷川に挟まれた丘陵の麓に集落と水田が広がっていた。発掘調査でも当時の土地利用は現代のそれとほぼ同じ範囲であったことが解っている。調査の結果、微高地には竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの集落遺構、南東側の低湿地には水田跡が見つかった。集落跡では、弥生時代後期の竪穴住居跡や倉庫跡などがある集落遺構面をはじめとして、掘立柱建物跡群があった古墳時代後期の集落面、12世紀後半～13世紀前半を主体とした中・近世集落面という、3つの遺構面を検出した。水田跡も弥生時代後期以降、断続的に稲作を行ってきた痕跡が見られ

た。水田跡では杭列を伴う大畦畔や小区画水田跡、溝跡などを検出した。出土遺物は、土器・石器・木製品・金属製品・種子等がある。調査区はA～C区、E区、F区に分かれており（第1図）、おおむねE区は集落域、A～C区は水田域となっている。

3 「柄付き鉄製鎌」について

（1）出土状況

鉄製鎌は平成17年度の発掘調査で見つかった。低湿地の水田域にあるB-南区の調査で、南東壁にかかる遺構B610から出土した。B610は東西方向に並ぶ杭列（SK-6）の南側に位置する遺構で、杭列から南側へ落ち込む不定形な溝状を呈している。杭列（SK-6）は自然木の丸杭や割杭が並び、所々に矢板を打ち込んでいる。一部、杭列に平行した横木が残っていることから、大畦であった可能性がある。鎌はB610の底部に近いところで出土した（写真3・4）。鎌の後主面側が上面に向き、鎌刃が遺構の縁に近いほう、鎌柄の末端は南側に向いていた。B610からはこの



写真1 B-南区杭列（SK-6）検出状況



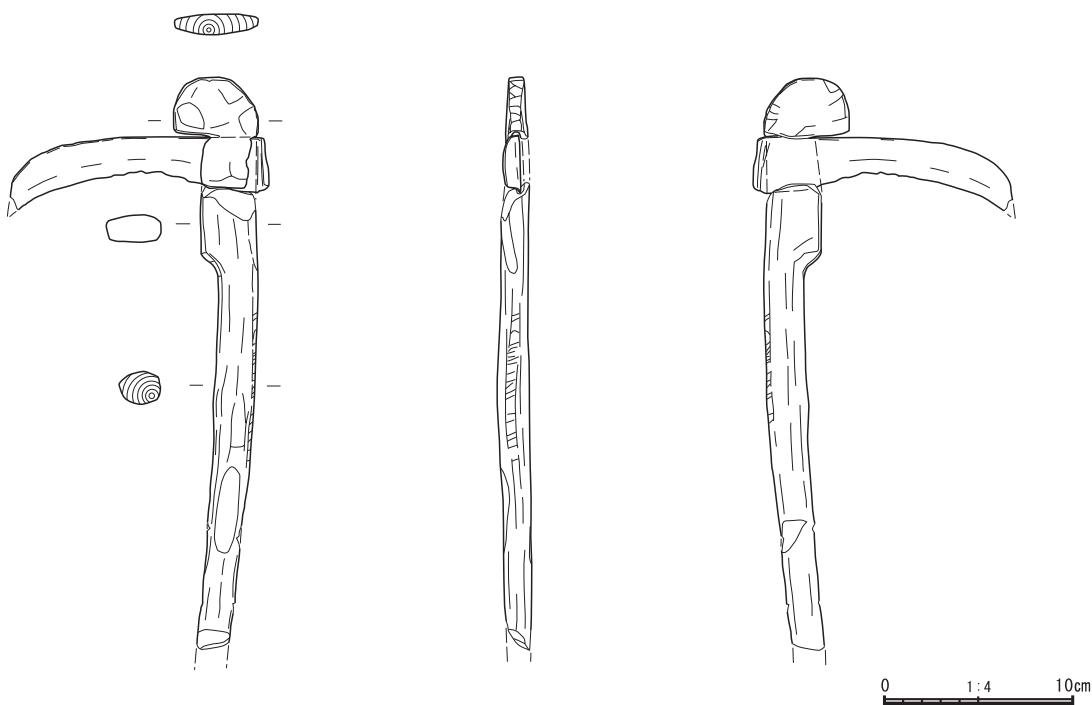
写真2 B-南区杭列（SK-6）の南側部分



写真3 B-南区B610完掘状況



写真4 柄付き鉄製鎌出土状況



第2図 藤枝市寺家前遺跡出土の柄付き鉄製鎌

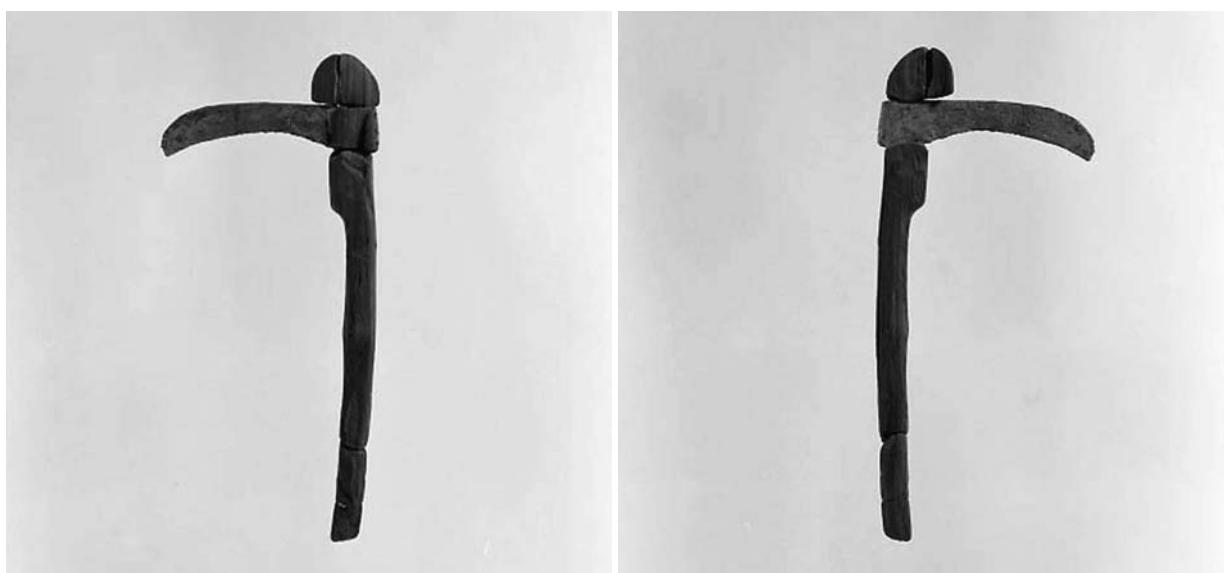
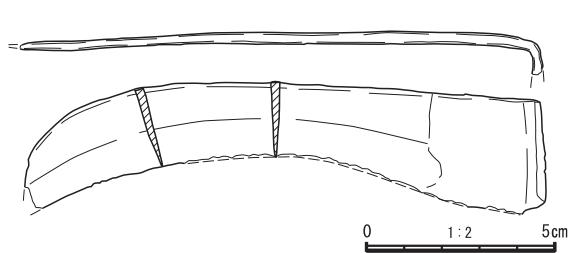


写真5 柄付き鉄製鎌（前正面）

写真6 柄付き鉄製鎌（後正面）



第3図 鉄製鎌刃



写真7 鉄製鎌刃

他に弥生土器の壺や土師器、橢円形の割り物や大型の槽、杭などが出土している。遺構図や出土状況写真、座標などを見る限りでは、土師器や大型の槽はやや上層から出土しており、鎌と同じ標高で出土しているのは橢円形の割り物と弥生時代後期に属する土器である。この出土状況から勘案すると、鎌は弥生時代後期～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

(2) 形状

鎌刃 全長13.7cm、身部の長さは10.5cm、幅は2.1cm、最大幅は3.1cmである。厚さは峰部で0.25cm、刃部は刃を研ぎ出してある。装着部分はやや厚く0.28cmである。現存する鎌刃の重量は44gほどあり、非常に残存状態が良好である。鎌刃の平面形状は曲刃と言うよりは、直刃に近い形をしている。刃の先端は僅かに欠損し、刃先から5cmの所で折れている。右側に柄を装着する基部があり、右端部は0.1～0.2cm幅ほど手前に折り返してある。峰部側から見ると、鎌はゆるやかに湾曲している。刃部は使用頻度の高い中央部分に細かい刃欠けが多く見られる。新品ではなく、かなり使い込まれており、研ぎ直しにより刃部が減っているのであろう。刃の形状は曲刃ではなく、刃部の曲線は使い減りによるものと見た方がいいであろう。

鎌柄 全長30.3cm、最大幅は頭部で4.5cm、軸部で1.7cmある。樹種はグミ属の芯持ち材が使われているが、素材となる木の樹幹は直径6cm以上あったと思われる。柄のグリップエンドにあたる末端は欠損している。また本来、刃の厚みほどの柄孔が切り込まれていたであろうが、後主面側は破損して無くなっている。

全体の形状については、頭部から9.5cmほど下方まで板状になっている。鎌刃の上は大きく半円形の頭部を作り出している。そのすぐ下に薄い鎌刃が入るよう、縦2.7cm、幅0.3cmの柄孔を切り込んでいる。装着部分には楔などの付属品は見られない。先端部より10cmほど下方から柄の断面形は円形状に変化する。軸部の直径は最大で1.7cmほどある。

(3) 樹種

鎌柄の樹種はグミ属との分析結果が出ている（註1）。しかし、木材資源としてグミ属を利用することは極めて稀なことである。グミ属の使用例は、県内では浜松市の恒武西宮・西浦遺跡で編錘14点（古墳時代中期）、旧福田町の元島遺跡で礎板（室町～戦国期）が製品として確認されている。この他には静岡市登呂遺跡や伊豆の国市山木遺跡、

菊川市中島遺跡では立株や自然木などに見られ、長泉町大平遺跡では炭化材（中世）に見られる程度である。県外では千葉県茂原市国府関遺跡で出土した鎌柄の未製品がグミ属と同定されている。そういう意味では、寺家前遺跡から出土した鎌柄は、かなり特殊な材を選択していると言える。グミ属はグミ科に属する落葉小高木で、ナツグミ、アキグミ、マメグミなど種類が数多くある。おそらく集落の周辺に自生していた手近な材を使って作られたものと思われる。

鎌柄に使われる樹種は全国的に見ると比較的多種多様で、特に決まった樹種を選択している様相は見られない。県内の弥生時代の鎌柄はヒノキ、クヌギ、イヌマキ、イヌガヤ、カシなどがある。一方、県外の例で多く見られるのは、やはりアカガシ亜属、クヌギ節などである。この他には、アオキ、カエデ属、クマノミズキ類、ヤマグワ、ケヤキなどの材がある。

(4) 類似例

鎌刃 静岡県内では弥生時代の鉄製の鎌が6点出土している（註2）。鉄製の鎌はいずれも鉄刃のみで鎌柄は伴っていない。唯一、菊川市下平川八幡ヶ谷古墳出土の鉄鎌には木質と思われる纖維が付着しているが、所属時期は古墳時代中期である。よって、弥生時代後期で鎌の刃と柄が装着した状態で発見されたのは、県内初めての出土例である。

鎌柄 一方、弥生時代の鎌柄は県内でも数例出土している（表1）。代表的なものは、静岡市に所在する有東遺跡で刃の部分も木製である完形の鎌が出土している。時期は弥生時代中期後半である。県西部の浜松市梶子遺跡では弥生時代中期の鎌柄が1点、同市入野にある角江遺跡でも弥生時代中期に属する鎌柄が4点、弥生時代後期の鎌柄が1点ある。このうち中期の2点は一本で作られた木鎌である。また浜松市（旧細江町）岡の平遺跡や同市伊場遺跡では弥生時代後期に属する鎌柄がそれぞれ1点ずつ出ている。樹種はヒノキ、クヌギ節、イヌマキ、イヌガヤ、カシ等の種類がある。

(5) 問題提起

静岡県内では弥生時代に属する鉄器は非常に少なく、鉄鎌は更に類似例が乏しい（1997 松井）。また類似例でも述べたように、木製の鎌柄もごく限られた数しか確認されていない。更に、着柄状態で出土した弥生時代の鎌は国内ではこれまでところ類例が見られない。

過去に、鎌柄や鎌刃は単体で出土していることが多く、

表1 静岡県内出土鎌柄・木鎌（弥生時代）

番号	遺跡名	市・町名	器種名	器種細分名	表面状態	樹種名	時代	備考
1	岡の平遺跡	浜松市	—			ヒノキ	弥生後期後半	
2	伊場遺跡	浜松市	鉄製鎌柄			ヒノキ?	弥生後期	D弥生
3	梶子遺跡	浜松市	木鎌	組合せ（柄）		クヌギ	弥生中期	拡張区-DD'
4	角江遺跡	浜松市	木鎌	一木		クヌギ節	弥生中期	
5	角江遺跡	浜松市	木鎌	一木	炭化	クヌギ節	弥生中期	
6	角江遺跡	浜松市	鉄製鎌柄			イヌマキ	弥生中期	
7	角江遺跡	浜松市	鉄製鎌柄		炭化	イヌマキ	弥生中期	
8	角江遺跡	浜松市	鉄製鎌柄			イヌガヤ	弥生後期～古墳初頭	
9	寺家前遺跡	藤枝市	鉄製鎌柄			グミ属	弥生後期	
10	有東遺跡	静岡市	木鎌	組合せ（柄・刃）		カシ	弥生中期	

装着状態や着柄角度等は推定の域を出なかった。今回の資料から幾つかの問題を提起することができよう。

① 鎌柄の形態と構造

弥生時代の鎌柄の形態は、其々に特徴がある。寺家前遺跡の鎌柄のように鶴頭状あるいは半月形とも呼べるような頭部を持つ柄は、弥生時代から古墳時代にかけて幾つか類似例がある。鎌柄の形態だけでは時期の特定は難しいが、少なくとも弥生時代にもこの形態の特徴を持つ鎌柄が存在したということが解った。

頭部の下には鎌刃を装着するための柄孔を切り込んでいる。柄穴の寸法は長さ2.7cm、幅は0.3cmで、対面まで貫通している。柄孔の幅は鉄刃を装着するため、非常に狭い。一方で柄孔幅が広く、かなり厚みのあるものを装着したかのような鎌柄もある。刃の材質が木製であるか、あるいは鉄製であるかの違いであろうか。

② 鎌刃の装着方法

本資料は、鎌刃を柄孔に差し込み、やや鋭角に保った状態で左端部を手前に折り曲げ、鎌刃が抜けないように固定している。楔等の付属物は発見されなかった。柄と刃が接着している部分は2.9cm幅であるが、本体もその部分は厚みを持ち鎌柄の柄孔と寸法が丁度合っている。使い減ったら刃のみ交換するのではなく、鎌刃と柄は一体と考えたほうがよいだろうか。

③ 鎌刃の装着角度

鎌刃の先端を欠き、鎌柄の下端部が欠損していることから、正確な角度は測れないが、鎌柄と鎌刃の装着角度は、およそ84～85度である。90度に近いが、やや鋭角気味である。他の鎌柄から推察する角度は必ずしも鋭角ではなく、鈍角のものもある。装着角度の違いは何を意味するのか。

④ 柄付き鉄製鎌の出土場所

今回見つかった柄付き鉄製鎌は水田部の遺構からほぼ完

形に近い状態で出土している。当時は貴重品であろう鉄製鎌が水田部にあったのは、何か別の意味を持つものであった可能性がある。

4 おわりに

弥生時代後期の鉄製鎌の類例は、まだまだ数少ないのが現状である。その中で今回紹介した鎌が着柄状態で見つかっていることに、この資料の重要性がある。問題提起は今後の課題でもある。本資料は平成25年度末までに刊行される寺家前遺跡の発掘調査報告書に掲載する予定である。こうした資料の公表や問題提起が、今後の研究に活かされれば幸いである。

本稿執筆にあたり、東北大学名誉教授鈴木三男氏、首都大学東京教授山田昌久氏、当研究所の杉山和徳氏、西尾太加二氏に有益な指導・助言、協力をいただいた。また図版作成については福島志野氏の協力を得た。末尾ながら記して感謝申し上げる。

註

- 1 東北大学名誉教授 鈴木三男氏による樹種同定結果が得られている。
- 2 鎌刃の資料収集にあたっては当研究所調査研究員の杉山和徳氏から貴重な収集情報を得た。

引用・参考文献

- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所他 1994 『古代における農具の変遷—稻作技術史を農具から見る—』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所・東日本埋蔵文化財研究会・東海考古学フォーラム
 松井一明 1997 「東海地方における鉄器の普及と展開」 『第4回鉄器文化研究会 東日本における鉄器文化の受容と展開 発表要旨集』 鉄器文化研究会・朝霧市教育委員会

Wooden Handled Iron Sickle Excavated at Jikemae Site in Fujieda City

Ritsuko NAKAGAWA

Summary: At the Jikemae site located in the north-east of Shida plain of Fujieda city, mid-Shizuoka, a settlement and a rice field were uncovered; both are estimated to be of the late Yayoi period. The features of pit dwelling are found at the skirts of a mountain and the features of rice field are spread in the lowlands situated south. The rice field was well established with taking geographical advantage. It was largely divided by wide paths equipped with a role of stakes and lined boards, and also, smaller paths were recognized in the division.

In one of the wide paths, in the south of SK-6 point, a wooden handled iron sickle was found. Judging from accompanied objects such as potteries, it highly likely belongs to the late Yayoi period. There has been no other example of excavation of a sickle and its wooden handle attached together, which belongs to the Yayoi period. This discovery can help revealing how to join a blade with a handle and its angle, and structure of wooden handle itself.

Key words: iron sickle with wooden handle, handle of sickle, blade of sickle, wide baulk with row of stake, Oleaster (*Elaeagunus L.*), parts of building, Shida plain, identification of wood species, wet rice field site, site of settlement in late Yayoi period